

## 「カナン侵入」

2014年05月24日

出エジプトしたイスラエルの民はモーセの後継者・ヨシュアに率いられ、神が約束した乳と蜜の流れるカナンに侵入した。その時のことを『申命記』7章に書いている。「あなたが行って所有する土地に、あなたの神、主があなたを導き入れ、多くの民、すなわちあなたにまさる数と力を持つ七つの民、ヘト人、ギルガシ人、アモリ人、カナン人、ペリジ人、ヒビ人、エブス人をあなたの前から追い払い、あなたの意のままにあしらわせ、あなたが彼らを撃つときは、彼らを必ず滅ぼし尽くさねばならない。あなたのなすべきことは、彼らの祭壇を倒し、石柱を砕き、アシェラの像を粉々にし、偶像を火で焼き払うことである」。驚くべき虐殺と偶像破壊が命じられている。

『申命記』は、カナン侵入の直前、モーセがイスラエルの民に語った告別説教として書かれているが、時代は下がりカナン定着後、篤い神信仰と強い民族主義を持つ「申命記史家たち」が書いた文書である。

カナン侵入は、ドラマチックなエリコの町の崩壊物語から始まる。そして、『申命記』の記述のように、武力を持って、カナンに住む諸民族を虐殺、追放し、12部族が分割して住み着いたと記されている。カナン定住民族は権力構造を持った強力な民族であり、一方のイスラエルは疲れ果てた難民であった。彼らが武力で占領、支配を獲得することは、歴史的事実としては起こり得ない。

どのようにカナンに侵入できたのであろうか。下記のような説がある。出エジプトしたイスラエルはカデシュ・パルネアで三十数年、滞在している。そこへカナンで抑圧された奴隷集団が逃げ込んできた。両者は苦難を負う者として、同じ認識を持った。彼らはカナンに侵入し、町々で共働して巧みに革命を起こし、宗教連合を結成した。そこから、イスラエル国家を建設していった。これが事実に近いのではないか。この過程で、篤い神信仰に立つ強力な民族主義が醸成されていった。

今日、ナショナリズムは平和と共生を望む人々から問題視されている。当然である。旧約聖書の時代はむき出しの暴力が支配した。民族の神と王の下にエネルギーを結集して、生存を守った。聖書に記されたイスラエルの民族主義には辟易させられるが、反面、憎い敵国・アッシリアの首都ニネベの住民も神の愛の中にあるという、世界主義に立った『ヨナ記』などは痛快である。当時は、民族主義が自分たちの命を守る手立てであったことは確かである。民族主義が自分のアイデンティティーを確保し、誇りの持てる民族になるため、誠実に参与することもあり得るのではないか。

今日の問題は、国家至上主義であろう。国家、国益という名の下で、少数民族が抑圧、弾圧されている悲劇があまりに多い。イスラエルのパレスチナ弾圧は旧約聖書時代の話であって、21世紀の出来事としてはならない。最近の中国の「中華思想」には怒りをとどめ得ない。

日本基督教団の信仰告白は、前文の初めに、プロテスタントらしく「聖書論」を告白している。その中で「聖書は…神の言にして、信仰と生活との誤りなき規範なり」とある。聖書を絶対的な神の言葉としている。上記、『申命記』7章の「虐殺、偶像破壊命令」を読んだことがないのかと問いたい。遂語靈感説から脱却し、時代に生きた人間が、その場で書いた文書であることを認めて、そこから、共生を目指して生き、生かされるメッセージをくみ取ることが大切である。